

## 巻頭によせて

院長 丹野三男

New England Journal of Medicine に掲載されている有名な Massachusetts General Hospital の症例記録はその長い歴史から、又その充実した内容から、アメリカの臨床医の水準の高さを示すものとして引き合いに出されることが多い。

症例の説明、鑑別診断、病理学的検討、解剖学的診断と臨床医の研修の場としては極めて価値のあるものと考えられる。

一方、アメリカの医療は訴訟にもちこまれることが非常に多く、いざという場合に備えて色々な検査を行うともきいているが、以上の症例を読んでもこんなに迄と考えられる程多くの検査がなされており、特に侵襲の多い生検が盛んに行われ、診断のためには手段を選ばないとさいうかゞわれるのである。

我が国においても時代の流れとは云い検査が極めて多くなりつゝあり、これに反し年々剖検率の低下が指摘されておるのが現状である。当院の過去 20 数年間をみても、昭和 40 年代の平均 39% から 50 年代は 44% と増加したが、55 年の 60% を最高として漸時下降の線をたどり、60 年、61 年は 30%、34% と減少したが、このことは検査法の発達に伴って生前診断が一段と確実になり、剖検への関心が薄らいでいくためであると懸念されるのである。

更に自由診療のアメリカならいざ知らず、保険診療の我が国では原則として療養担当規則からはずれた診療報酬請求は査定が行われ、病院経営上大きな問題になりつゝある。実際の医療の現場にあっては診断治療の困難な症例や生死の間において集中治療を行わなければならない症例もある筈であり、規則でのみしぼることの出来ないのが医療の姿ではないかと考えるのである。

宮城県社会保険診療報酬審査委員会の佐藤浩三委員長は、審査は学術医術の進歩を阻害してはならない、医療は患者のために存在するのであって保険者や医師のためにあるものではないから、医療の進歩は速やかに患者に還元されなければならないと極めて格調の高い識見を医師会報に述べておられる。

近時医療費抑制が声高に叫ばれているが、進歩する近代医療を日常診療に十分に反映し、眞に患者のための医療を心掛けることこそ医療人の本務であることを改めて強調し、巻頭の辞とする次第である。